

こまつじょうほんまるやぐらだいいしがき
小松城本丸櫓台石垣

種 別	小松市指定文化財 史跡
指定年月日	昭和38年11月3日
所在地	丸内町（小松高校敷地内）

小松城は初め一向一揆が築いた砦であったといわれている。天正7年（1579）に柴田勝家によって一向一揆が鎮圧された後、村上頼勝、次いで丹羽長重が城主となった。関ヶ原の戦いの後は前田家の所領となり、元和元年（1615）に一国一城令で一時廃城となった。

しかし寛永16年（1639）、一国一城令の例外として、加賀藩3代藩主前田利常の隠居地としての居城と城の修復が幕府に認められる。修復は大々的に行われ、現在伝わっている小松城とその城下が形作られた。小松城は堀の中の8個の島が浮かぶ構造から「浮城」^{うきしろ}と呼ばれ、城の面積は金沢城の倍近くに及んだといわれる。利常の死後は城代・城番が置かれ、城は廃藩まで続いた。

この石垣は十間四方の大きなもので、直線的に整形した石を隙間なく積み上げる「切込接」^{きりこみはぎ}という技法が使われている。石材は戸室石^{とむろいし}⁽¹⁾のほか、現在の小松市域の蓮代寺、長谷、鶴川より切り出した石を使用している。

明治期に、小松城の建造物・石垣・堀は多くが取り壊されたため、城の面影は殆ど残っていない。現在かつての城域に残されているのは、この本丸櫓台の石垣と、隣接する井戸、本丸堀石垣のごく一部のみである。

- (1) 戸室石：現在の金沢市東部の医王山、戸室山、キゴ山で採れる石。加工が容易で、金沢城や兼六園でも使用された。

